



ストランディング 漂着物処理

知床の海岸には時々クジラやイルカ、トドといった海獣類が漂着することがあります。漂着した海獣の死体は陸に暮らす生き物にとってはまたとないご馳走。ヒグマは驚異的な嗅覚で何キロも離れたところから、打ち上げられた海獣のニオイを嗅ぎつけてやってきます。

市街地の近くに打ち上げられた漂着物はヒグマの誘引に繋がり、市街地にヒグマが入り込んでしまう原因にもなるため、即座に回収と処理が行われます。

羅臼町で活動する知床財団スタッフも、制服の上に漁師さんと同じ胴長を履いて漂着物の処理に向かいます！



◀ 今回の漂着物は種が判明できない状態のものでしたが、巨大なクジラやオサガメなどの珍しい種が漂着することもあるのだとか。大型の海獣が漂着する事もある羅臼町には、専用の解体施設も用意されています！



▶ この日はなんと、電気柵を張る場所に巨大な倒木が！チェーンソーで木を少しずつ切って退かし…。いつもなら数分で終わる作業が、一大イベントになっていました。

普及啓発イベント

野生動物対策スタッフの相手は動物だけではありません。「伝える」ことはヒグマ対策にとって重要事項。旅行者や地元住民の方に向けてヒグマについての情報発信に努めています。秋は知床のイベントシーズン。地域の方が参加するお祭りでは電気柵の普及や紙芝居公演、ヒグマと共存するための方法を学べるクイズゲームを行ったりもしています。

また、より安全で楽しく、野生動物に優しい旅になるよう、「野生動物との距離感」や「ヒグマを見ても車から降りないこと」などを国立公園の利用者へお伝えする官民協働の「知床ディスプレイキャンペーン」にも参画しています。ヒグマに出会っても近づかない、餌をやらない、それがいつか一般常識になることを願って取り組んでいます。



市街地河畔の伐木処理

斜里町ウトロはヒグマが町に入らないように町の周りを電気柵で囲っています。しかし、川沿いや道路沿いなど電気柵の設置が困難な場所からヒグマが入ってきてしまうことも時々あります。

市街地の中に藪や低木などが密集した場所があると、万が一、ヒグマが侵入してしまった際に、彼らがその中に潜ってしまう事も…。さらには、対策現場のスタッフの身の安全を確保するため、市街地の中の見通しをよくして置くことはとても大切なことです。

地域の皆さんや対策スタッフの安全を守るために、藪の刈り払いには欠かせない業務です。

電気柵メンテナンス

電気柵は野生動物の侵入を直接的に防ぐことが出来る有効な手段です。しかし、それは電気柵が正しく機能していればの話。正しく設置されていなかったり、電気柵に草などが触れて漏電が起こっていたりしては、せっかく電気柵を張ってもヒグマの侵入を許してしまうことになりかねません。

計測器での電圧チェックや草刈りなどの日々のメンテナンス業務はもちろん、倒木などの不慮のアクシデントにより電気柵が正常に稼働しなくなってしまうときも即座に現場に駆け付けて電気柵を張り直します。

実りの秋はヒグマシーズン。ヒグマたちは冬眠に向けて栄養を蓄えるため、食べ物を探して活発に動き回ります。そして秋は行楽シーズンでもあるため、ヒグマとニンゲンの出会う可能性が高くなる時期でもあります。そんなヒグマとの軋轢を人知れず未然に防ぐ、知られざるヒグマ対策スタッフのお仕事の一部をご紹介します！

活動特集

知床財団野生動物
対策スタッフのお仕事

対ヒグマ
対策の秋



知床ヒグマ対策連絡会議

知床ヒグマ対策連絡会議は行政機関・地元自治体・実務者で構成され、ヒグマの動向や問題事例の発生状況などを踏まえながら、ヒグマの管理や対策などのあり方について協議を行い、知床半島ヒグマ管理計画に沿ってより適切な施策を決定していく場です。ヒグマ対策の実務者として知床財団も会議に出席します。

知床半島におけるヒグマの管理について議論する際には、現場実働部隊の視点から必要な施策を提言することも私たちの仕事の一つです！



知床財団のスタッフは普段どんな仕事をしているの？
あまり知られていない日々の取り組みをご紹介します。



展示について詳しく知りたい方は
QRコードからご確認下さい。



羅臼地区「ヒグマ対策ドローン」を導入！

今年度より羅臼町役場にヒグマ対策用のドローンが導入されました。

機体の操縦や日々の管理は我々、知床財団 羅臼地区事業係が担っています。この機体は高倍率ズームカメラや赤外線カメラを搭載しているため、ヒグマの市街地侵入時や藪の中に潜んだ際に発見しやすくなるといった効果が期待されます。これまで培ってきた経験やスキルにテクノロジーを融合させることによって、より安全で効果的な野生動物対策へとつなげていきたいです。

最新機能が凝縮された機体のため、早く使いこなすことができるよう日々操縦訓練を続けています。



活動日記 知床財団



知床サスティナブルフェスにあわせて 馬のオブジェを制作しました！

今年も10月12日と13日の2日間にかけて知床サスティナブルフェスが開催されました。イベントでは昨年度に引き続き、100平方メートル運動地で馬搬の実演を行いました。

さらに今年は、自然センターの館内でも開拓の暮らしや馬と生きてきた歴史を知っていただけるようにと企画展示室の展示制作に力を入れました。斜里町立知床博物館から拝借した開拓当時の道具の展示に加え、より多くのお客様を惹きつけられるよう、地元の方に協力していただきながら流木で馬のオブジェを制作しました。

展示は来年の4月まで行う予定ですので機会があればぜひ足をお運び下さい。

知床財団 ヒグマパトロール

対策スタッフに
プチ密着！

ヒグマ対策スタッフは、ヒグマが活発に行動する時期は国立公園内のパトロールを行います。

パトロールの頻度は1日に2回ほど。他の業務スケジュール次第ですが、午前と午後にそれぞれ行うことが多いそうです。

密着日は9月の大型連休明け。「連休中は大規模なヒグマ渋滞が起きて対応に追われたけれど、旅行者の数も落ち着いているので今日は何もないと思います。」そんな会話をしながら公園内を運転していると、まさにヒグマ渋滞発生中でした！

停車している車や、降車している旅行者などに「ご移動をお願いします」と声をかけながらあわただしく対応が始まりました。

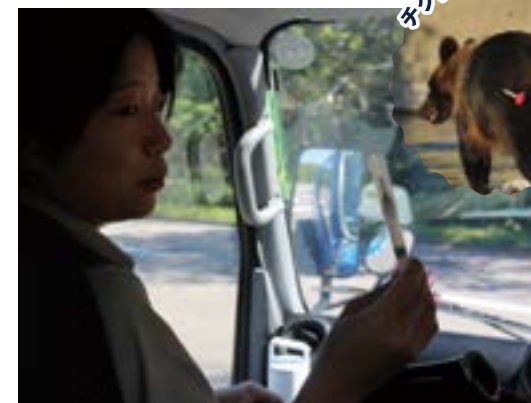
ヒグマは付近の藪の中に潜んでおり、渋滞が解消されると同時にほっとしたような様子で道路を横断し木立の方へ移動し始めていました。この垂成獣サイズのヒグマは対策スタッフ曰く、最近目にするようになった個体らしく、DNAを調べるために即座にダートバイオプシー（麻酔銃を使用して、少量の皮膚片を採取する調査）を準備します。しかしヒグマはその間に森の中へと消えてしまい、DNAを採取するまでには至りませんでした。ただ、対策スタッフの中ではヒグマの外見や顔つきから「多分あの家系のクマではないか…」というところまでは予想出来ているらしく、日々ヒグマと向き合う対策スタッフの情熱（執念？）を感じることが出来ました。



通報が無いので気が付かない
「サイレントヒグマ渋滞」が発生中！



スタッフが最近よく見かけるというヒグマ



ダートバイオプシーを準備！

実は…地道で目立たない ヒグマ対策

皆さんにとって知床財団のヒグマ対策のイメージはどんなものでしょうか？

メディアで報じられるような、ヒグマの市街地侵入やヒグマ渋滞での対応など人間とヒグマの間に文字通り直接立つ姿を想像することが多いかもしれません。しかし、今回ご紹介したような地道で目立たない活動こそ、ヒグマ対策には重要なのです。

ヒグマは「困った存在」ではなく、知床の価値のひとつ。ここに暮らす人、訪れる人、そしてヒグマなどの野生動物、皆が豊かに共存して過ごせるように、ヒグマへの知識と経験を駆使して対策スタッフは今日も知床を奔走しています。知床財団のヒグマ対策スタッフへ、応援をよろしく願っています！